

2017年7月19日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 荒井 俊行
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 青年期のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因
論文題目（英文） Factors Affecting Youth Participation and Non-participation
in Volunteer Activities

公開審査会

実施年月日・時間 2017年6月19日・13:00-14:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	西村 昭治	博士(人間科学)	大阪大学	教育工学
副査	早稲田大学・准教授	尾澤 重知	博士(知識科学)	北陸先端科学 技術大学院大 学	教育工学
副査	早稲田大学・名誉教授	野嶋 栄一郎	博士(人間科学)	大阪大学	教育工学
副査	早稲田大学・名誉教授	青柳 肇	文学修士	早稲田大学	発達心理学

論文審査委員会は、荒井俊行氏による博士学位論文「青年期のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 「ボランティア活動は無償の行為であるとする、参加成果志向は自身に対するみかえりを求めているのではないか？その矛盾にどう答えるのか。」という質問に対し「ボランティア活動を論じる際には、その特質から説明されることが多く、例えば、従来は主体性・社会性・無償性・先駆性に基づく活動であると定義されてきた。しかしながら、現在ではグレーゾーンが広がるなど、ボランティア活動を定義づけるその実態が変容してきている。また、参加動機も現在では利他的動機と利己的動機も含めた

様々な複数動機と捉えるのが主流になっている。これらのことから、人のためという一義的な目的のみならず、自分のためにもなるという参加成果への期待があることも含めてボランティア活動を捉えた。」との回答を得た。

- 1.2 「ボランティア活動の発端は災害（人災も含む）に関連して生じた現象。それを改善する行為は実は、ボランティアではないか。個人の欲求より先に災害など外的な要因があるのではないか。」という意見に対し「ボランティア活動はもともと社会の要請によるものだが、その一方で、ボランティア自身の自己実現の手段など個人の欲求に応える活動であるという面もあるうえに、教育的な効果や意義もある。本研究では社会的要請と個人の欲求の視点を統合し、分析している。」との応答を得た。
- 1.3 「本研究は全て質問紙が元になっている、より個別的なインタビュー等の分析が有っても良かったのでは。これはこれでいいが、それが不満ではある。私の知る限り動機づけの観点からボランティアに関する研究はなかったので本研究は非常に価値がある。行動が手段となっているのが外発的動機と考えると、機能的自律を考えれば内発的な動機につながると思うが如何か。」という質問に対し「外発的動機から内発的動機に繋がることもあるということでは、ボランティア行動に関しても切掛けとして何らかの外発的動機づけからボランティア行動を始め、参加成果の充足や活動参加の満足を感じて内発的動機に転化していくことがあると考える。このことは、デシとライアン（E. L. Deci & R. M. Ryan）が動機づけ理論での自己決定理論によって外発的な動機づけから価値の内在化が進んで自律的な内発的な動機づけによる行動へ連続的に変化していく状態を示していることに通じると考える。次に調査方法に関しては、本論文ではボランティア活動全般の統合理論として、まずはモデル化を図ることを目標としたため、質問紙調査法に基づく計量的アプローチを用いた。ボランティア行動をさらに解き明かすため、今後、個別的なインタビュー調査等の質的アプローチも行っていきたい。」との回答を得た。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。
 - 2.1.1 研究は全て質問紙が元になっている、より個別的なインタビュー等の分析が有っても良かったのでは。
 - 2.1.2 質問紙を行った期間が書かれていないので、その部分を記したほうが良い。
 - 2.1.3 有効回答数が書かれていないところがある。
 - 2.1.4 人間科学に対する貢献について明確に示すべきである。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
 - 2.2.1（修正後）p106「第7章 今後の課題」最後の段落として以下を追記「第4は、調査方法の問題が挙げられる。本論文では、ボランティア活動全般の統合理論として、ボランティア行動への生起・促進のモデル化を図ることを目標としたため、質問紙調査法に基づく計量的アプローチという調査手法を用いた。しかしながら、インタビュー調査法等の質的アプローチという異なる調査手法を用いて、個々の

ボランティア行動を引き起こす内的メカニズムの解明に迫ることは、本論文で提案したモデルの実践的適応の検証に繋がるものと考え、さらに、質的アプローチを用いることで、ボランティア活動の推進・普及に繋がる新たな知見が得られる可能性もあるものと考え、」

- 2.2.2 個々の研究の調査時期を論文の調査方法または手続きにおいて明記した。
- 2.2.3 以下の箇所を修正し、有効回答数を明記した。「修正前 (p27 「研究1/2. 予備調査 2.2結果」上から4行目)、(p39 「研究2/2. 予備調査 2.2. 結果と考察」上から2行目)、修正後 (p27 「研究1/2. 予備調査 2.2結果」上から4行目～5行目, 9行目)、(p40 「研究2/2. 予備調査 2.2. 結果と考察」上から2行目)」
- 2.2.4 人間科学に対する貢献についての記述を加筆した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：ボランティア行動に関する心理学的研究に関して、100 編にも及ぶ先行研究を分析し、ボランティア活動の重要性を確認するとともに、ボランティア活動推進の観点から今後検討すべき課題を抽出している。その上で、大学生を対象として青年期におけるボランティア活動全般への参加行動や不参加行動を引き起こす内的メカニズムを明らかにすることによって、今後の若者のボランティア活動の推進や教育過程でのボランティア教育のあり方に繋がる知見を得ることを本研究の目的としており、その目的は明確でありかつ妥当であると判断するものである。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究は数回に渡る 500 名規模の質問紙調査を基に、因子分析（主因子法）を実施し、被調査者の属性（ボランティアへの参加経験等）毎に因子得点を集計し分散分析を行った。因子分析の結果も分散分析の適応法も妥当である。なお、本論文で実施した研究については、すべて質問紙によるデータに基づくものであり、「任意回答」、「無記名」、「対象者保護」、「社会的生活で、経験したり日常会話の内容に出てきたりする範囲を超えての質問項目は設定しない」など調査において倫理的な配慮が十分になされていると評価した。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：質問紙調査の分析から得られた結果は明確であり、そこから導き出された具体的な「ボランティア行動への生起・促進モデル」は今後のボランティア活動の推進に資するものである。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 先行研究において、対象者はボランティア活動経験者が主であり、特定の活動分野を対象とした研究が多く、また不参加志向動機についての解明が殆ど行われていない状況である。大学生のボランティア活動の参加志向動機と不参加志向動機及びボランティア活動イメージと参加成果志向の構成要因を新たに明らかにした。
 - 3.4.2 ボランティア活動を幅広く捉えたことから、ボランティア活動の推進に留まらず、ボランティア教育のあり方に繋がる知見を得た。
 - 3.4.3 動機づけの観点から、参加志向動機・不参加志向動機に対して、他の要因が及ぼ

- す影響を検証することによって、ボランティア行動の内的メカニズムを解明した。
- 3.4.4 ボランティア活動の推進という新たな観点から「ボランティア行動への生起・促進モデル」を提案した。併せて、ボランティア活動の推進方策等の具体的なポイントを指摘した。
 - 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 ボランティア活動に関して、参加行動・不参加行動を規定する要因を明らかにできたことは、今後のボランティア活動の推進・ボランティア教育のあり方において有用な知見が得られた。
 - 3.5.2 動機づけの観点からその行動を引き起こす内的メカニズムの解明は、ボランティア研究・動機づけ研究にとって意義があり、今後のさらなる解明に繋がる。
 - 3.5.3 ボランティア行動への生起・促進モデルが提案され、具体的な推進方策等のポイントが提唱されたことは、今後の推進・普及を図る上で有意義であり、研究と実践をつなぐ実践的・学際的研究としても意義がある。
 - 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
 - 3.6.1 既存の社会システムの限界や少子高齢化の進行への対応という課題への方策のひとつとして、ボランティア活動を取り上げ、人間科学の持つ学問的意義の実践として、その課題解決に向けて一定の研究成果を挙げた。
 - 3.6.2 ボランティア行動を規定する要因は多様であることを解き明かし、統合理論モデルとして「ボランティア行動への生起・促進モデル」を提案したことや具体的な推進方策等のポイントを提唱し、学問と社会をつなぐ人間科学としての研究成果を挙げた。
 - 3.6.3 ボランティア活動という社会的現象がもつ多層的な現代的意義を研究する上で、人間科学からのアプローチが有効な研究アプローチであることを実証した。

- 4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
- 荒井俊行. 青年期のボランティア活動への参加志向動機・不参加志向動機の構成要因. ソーシャル・モチベーション研究 8, 14-25, 2015
- 荒井俊行. 大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響. 日本教育工学会論文誌 40(2), 85-94, 2016
- 荒井俊行, 野嶋栄一郎. 大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響. 日本教育工学会論文誌 41(1), 97-108, 2017

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上